

論文内容要旨

助産師を対象とした周産期の喪失ケアのための
教育プログラムの実施可能性と有効性に関する研究

保健学専攻 心身機能生活制御科学講座 精神機能制御学
(主指導教員：岡村 仁 教授)

保健学専攻 看護開発科学講座 老年・がん看護開発学
(副指導教員：宮下 美香教授)

保健学専攻 看護開発科学講座 地域・学校看護開発学
(副指導教員：川崎 裕美教授)

岡永真由美

流産・死産・新生児死という周産期の喪失を体験した両親の反応に焦点を当てた研究は、1980年代より欧米の心理学を中心に実施され、入院中および退院後の両親へのケアの指針や社会資源が紹介されるようになった。助産師は、母親や家族のビリーブメント（死別）の過程を共に追ひ、関わり方を内省しながら経験を培う。これまで、周産期の喪失ケアに対する卒後教育プログラムの必要性は考察されてきたものの、卒後教育プログラムの実施及び評価に関する研究は限られており、助産師を対象とした教育プログラムはこれまで見当たらなかった。

そこで本研究は、助産師が周産期の喪失を体験している女性や家族への知識に基づいた実践ができること、および、客観的に自らのケアを評価できる態度を養うことを目指した卒後教育プログラムを開発、試行し、プログラム内容の実施可能性と有効性を検証することを目的に検討を行い、以下の結果を得た。

プログラム開発に先立ち、周産期の喪失(perinatal loss)の概念分析を行い、助産師が周産期の喪失ケアに関して印象に残っている状況や感情の傾向を明らかにすることで、教育プログラムの枠組みおよび、プログラムへのニーズを検討した。これらの結果から、教育プログラムの目的を、「助産師が、周産期の喪失を体験した女性や家族の喪失や悲嘆、わが子への愛着を理解することによって、ケアの意味づけができる。そして助産師自身のケアへの不確実さに伴う感情に気づき、対処できること」とした。

プログラムは、喪失と悲嘆、愛着を中心概念とし、入院中に行うことが望ましい周産期喪失ケアへの教育プログラムの目標を、1) 赤ちゃんを産んだという体験を基本においた両親の悲嘆やわが子への愛着の理解とケアを意味づけられる、2) 夫婦や家族の絆を深め、コントロール感を取り戻すための、施設で提供できるケアの検討（医療従事者間の連携、病棟や外来との連携等）を行うことができる、3) 助産師自身のケアへの不確実さに伴う感情について参加者が情報共有できる、4) 実践を通して、包括的な周産期の喪失ケアの自己評価ができる、と設定した。教育プログラムは、プログラムへの参加しやすさを考慮して1日で行い、講義・グループ討議から構成された3時間20分のプログラムとした。目標4)は、参加者個々の3ヵ月後の実践目標に沿って、自己評価を行うこととした。

次に、助産師を対象とした周産期の喪失ケアのための教育プログラムを実施し、その実施可能性と有効性の検討を行った。プログラム参加者は21名であり、プログラムの評価は、教育プログラム前、プログラム終了時、3ヵ月後の3回で、質問紙調査と個人面接を行った。

評価は、プログラム内容の評価、プログラム前の周産期の喪失ケアに関する主観的な知識への自信や実践状況への自己評価15項目(以下周産期の喪失ケアの自己評価とする)とし

た。周産期の喪失ケアの自己評価はVASを用い、プログラム前、プログラム終了時、3か月後の3回実施した。参加者には、プログラム終了直後に3か月後の実践目標設定を依頼し、3か月後の目標に対する自己評価を調査した。

教育プログラム内容及び構成は、参加者の満足度が高く時間設定も適当という評価であった。

周産期の喪失ケアに対する自己評価は概ね平均値の上昇を認めた。有意に得点差を示した項目は、周産期の喪失ケアに関する個別ケアへの知識および実践では母親の悲嘆、父親の悲嘆、夫婦の関係性で、周産期の喪失ケアへの気持ちで、有意な得点変化が認められた。

3か月後の実践目標は概ね達成された。『赤ちゃんを産んだという体験を基本とした両親の悲嘆やわが子への愛着の理解とケアを意味づけられる』に対する自己評価は、【愛着や悲嘆の理論にケアがつながる】【父親にも配慮する】【家族の悲嘆としてとらえる】の3つのカテゴリーに、『夫婦や家族の絆を深め、コントロール感を取り戻すための、施設で提供できるケアの検討』に対する自己評価は、【継続ケアのあり方を考える】【カンファレンスを活用する】の2つのカテゴリーに、『助産師自身のケアへの不確実さに伴う感情について情報共有できる』に対する自己評価は、【助産師自身の悲嘆への気づき】【同僚の反応に気づく】【同僚を支える】の3つのカテゴリーに、『実践を通して包括的な周産期の喪失ケアの自己評価ができる』に対する自己評価では【ケアを意味づける】【自己課題の明確化】の2つのカテゴリーにそれぞれ分類できた。

以上、本教育プログラムによって、対象者の周産期の喪失ケアへの知識への認識が高まり、ケアに対するアセスメントの視点やケアの展開が深まった状況が明らかとなったことから、本プログラムの有効性が示唆されたと考える。今後は、プログラム内容を洗練し、対照群を設定した比較試験を行うことで、周産期の喪失ケアに貢献できるプログラムへと発展させたいと考えている。(1990字)